

往復書簡(前編)

千葉県で主に「梨」「米」「野菜」を生産する實川真由美さん(株式会社アグリスリー 農園コンシェルジュ)に、「ひとと地域をともし」農業の発展についてお話しいただきました。

拜啓 高木 勇樹 様

このような機会をいただきとても感謝しております。

私は、今から13年前、農業とは無縁なサラリーマン家庭から嫁ぎ農家の嫁となりました。結婚前からデートは農作業が多く、この頃から農業は、休日も農業と寄り添い常に私の生活の一部となっています。

嫁いで2年後には長男が誕生し3年後には長女、5年後には二男と3人の子供に恵まれました。次男が1歳になるまではお手伝い程度の農作業をしていましたが、6年前、法人化したのをきっかけに世代交代し、私も本格的に就農しました。作っている作物は梨(20品種)・水稲(7品種)・野菜(いんげん、かぼちゃ、ミニトマト等)の複合経営で、今年度より新たに加工部門をスタートさせました。今夏には、カフェを併設した加工施設が完成します。このカフェでは美容と健康を軸にした弊社オリジナルの美味しくて、安心・安全は当たり前の商品を提供します。農業や食のイベント等を実施して、地域や県外の方とのコミュニケーションにしたいです。

私は、農業を続けるには、ヒトとヒトとの繋がりが信頼性がとても重要だと思っています。昨年の大型台風の時のことです。収穫待ちの梨2トンが落果してしまいました。即日、落果梨救済プロジェクトを立ち上げ、皆さんにご協力をいただきながら、SNSの力も借りて、本当は売り物にならない全ての梨の販売先が、たった2、3日で全国各地に決定しました。これも社長である夫が、今までヒトとの繋がりを大切に信頼関係を育んできた賜物だと思っています。

また、農業の発展こそが地域の発展につながると私は思います。地域や異業種の方との交流を大事にして、農家だけでは完結できない問題(特に六次化)を解決したいです。私たち生産者は美味しい農産物を作るプロです。しかし、加工品開発、販路拡大、人材育成、経営感覚を持つ等は全員が出来るとは限りません。それぞれの

スキルを持った方を私たちが雇用する事もできるのです。

弊社では県外から若い社員を積極的に採用し、町民を増やしたいと思っています。現に埼玉・神奈川からの社員は結婚し町民になりました。人材育成にも力を入れており、適材適所の採用を行い、新人研修やリーダー研修等には外部講師を呼んでいます。そして、綺麗・整理整頓は当り前の働きやすい職場を目指しています(グローバルGAP検討中)。正社員7名、パート3名、今年度新規採用2名全ての仲間に、個々が輝ける場を提供し、チーム全体で成長していきたいと思っております。

只今弊社では販路拡大に関しましてお米部門に力を注いでおり、常にマーケットインを心がけ、お客様に合ったお米の提供を考えています。しかし、産地銘柄の制度があり自由な販売が出来ないのがとても残念です。私はお米の美味しさ・大切さを子供たちに教えたくて食育アドバイザーの資格を取得し、今年度からまちの食育推進委員になりました。

結びに、私の思う農業とは仕事をしながら五感で季節を感じられ、旬のものに触れ、食への関心を育てることが出来る大事な産業だと思っています。魅力を伝え農業をやりたい人材を増やし日本の食を支えている大事な産業と奇麗な田園風景を守りたいです。これからも夫婦力を合わせ仲間とともにチーム力をパワーアップさせ、日々新しい事に目を向けチャレンジしていきます。

平成29年4月吉日

實川 真由美(じつかわ まゆみ)

1983年 千葉県生まれ
株式会社アグリスリー 農園コンシェルジュ。リゾート米や梨の木のカスタマイズなど、女性目線から農業の魅力を発信。農林水産省農業女子プロジェクト参加、横芝光町農業振興会女性部会員、横芝光町食育推進委員、食育アドバイザー、ベジフルアドバイザー、食品衛生責任者



敬具

拝復 實川 真由美 様

お手紙を拝見し、50年前、私が農林省に入省した頃と全く違う風景が農業・農村に広がっていることを実感させられ、今、日本の農業・農村に素晴らしい変化が起こっているのだと改めて感動しました。

入省二年目の秋の繁忙期に一カ月農家に住み込むという研修がありました（私は滋賀県稲枝町（現彦根市）の稲作と町役場職員を兼ねた農家にお世話になりました）。その時の情景が今でもまぶたに浮かびますが、このお手紙の風景に比べると、まるで異国のもののように感じます。

農家と無縁のサラリーマン家庭から嫁ぐ、そしてデートは農作業と、さらりと自然に書いておられる。

正直、素晴らしいし、羨ましいです。

御社はこのNPO法人J-PAOの人材育成、事業化支援、販売支援というミッションを自らのこととして実践しておられ、ひととひと、異業種、地域とのつながりをITなどのツールで存分に活用されています。

御社は正に、私が常に言っている「農地・ひと・技術・企画・販売力などの経営資源を自らの創意工夫で総合的に發揮し、利益を得る。総合知識集約産業たる農業を持続的に経営されている持続的農業経営体」のモデルだと思います。

更に、グローバルGAPを検討されるなど、日々新しいことに目を向け、五感と「好きな仕事・やりたい仕事」をやり続ける事を見てくれるのは子どもたち」という女性の感性を活かしチャレンジされています。

お手紙を読ませて頂く限り、どう返事を書いてよいか困るほど非の打ちどころのない経営の実践者と申し上げてよいと思います。

経営を引き継がれて間もない御社が、これからも持続的なもうかる農業経営をしていくのに何かが必要か、私なりに考えてみました。

ひとつは、今現在の経営を想像力、創造力を働かせ現時点で考え得るあらゆる角度からみて、未来永劫変えてはいけないもの。こととは何か。これを「経営理念」とし、これからの変化のモノサシとすること。

もうひとつは経営規模が人的・物的あらゆる面で拡大していく方向にある中で、いわゆる企業統治をどう確保していくのか。具体的にはまず夫婦の役割分担と経営の中での緊張関係の維持を担保する明確なかたち（体制）作りをすること。

この二点と、お米の提供面での産地銘柄制度の制約とは具体的にどういうことかについて、次回意見交換ができればと思います。

これから農作業も子育ても何もかもチャレンジの日々と思いますが、健康第一で頑張ってください。

敬具

平成29年4月吉日

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

1943年 群馬県生まれ

1966年 東京大学法学部卒業後農林省入省。

食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任

農林水産事務次官、2001年退官

2002年 ㈱農林中金総合研究所理事長

2003年 農林漁業金融公庫総裁、

2008年同公庫退任

2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構

副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国の農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

